

診療所実習を体験して感じたこと

あかりこどもクリニック 3年 TI

今回の地域包括医療実習Ⅲでは、あかりこどもクリニックに参加させていただいた。健診や予防接種の場面に立ち合わせていただき診察の工夫や保護者への対応、さらにはチーム医療の大切さを実際に見て学ぶことができ、普段の座学の授業からでは学べないような貴重な経験をさせていただき非常に有意義な経験となった。

実習の初めは院内の机、椅子をアルコールで拭きあげる作業を体験させていただいた。小児科では感染症のリスクが高く、清潔な環境を保つことが診療と同じくらい重要であると実感した。患者やその家族が安心して利用できる環境を整えることができることも、医療従事者の大切な役割の一つだと感じた。

次に自分は診察や予防接種を見学させていただいた。自分はまだ小児科の講義を受講しておらず小児科の診察は患者が泣いてしまい診察がうまく進まないのではないかと考えていたが、診察を見学させていただきそのようなことはなく泣いてしまう患者がいても先生が励ましの言葉をかけながら診察にあたっており、スムーズに診察を行っていた。予防接種は患者の家族に協力していただき行なっていることを学んだ。診察の際先生から学んだことで印象に残ったことは、大きく3つある。

1つ目は患者を待たせてしまった際は診察の前に「お待たせしてしまい申し訳ないです」ということを必ず伝えるということ。これは当たり前のように思われるかもしれないが患者の家族と信頼関係を築く上では欠かせないことである。診察が遅れること自体は外来の混雑など不可避な事情によって生じ得るが、そこで何も謝らずに診療を始めてしまうと、家族に不信感や不満を抱かせる要因になってしまう。診察を待つ時間は、親にとって不安や苛立ちを募らせるものになりやすい。そこで一言でも誠意を伝えることで、医師と保護者との関係がスムーズになり診療にも良い影響を与えるという点が印象に残った。医学知識だけでなく、こうした人間的な対応も医師にとっては不可欠と学んだ。

2つ目は「小児科は9割が特に問題なく残りの1割の医療介入を見逃しては行けない」という姿勢だ。小児科の診療においては来院する患児の大部分は健診や予防接種にくる患児が多い。そのため自然寛解することが多い。しかし残りの1割には、迅速かつ的確な医療介入を必要とする病態が含まれており、ここを見逃さないことが小児科医の大きな使命である。特に子どもは症状をうまく表現できず、診察時には元気に見える場合でも潜在的に重症疾患が隠れている可能性がある。そのため診察では、単に症状の有無を確認するだけでなく、バイタルサインの評価や全身状態の観察を丁寧に行い、病歴の聴取も家族との信頼関係のもとで詳細に実施する必要がある。軽症例の中に潜む重症例を拾い上げる「見逃さない姿勢」を持ち続けることが、小児科医に極めて重要と学んだ。

3つ目は診察や説明を一通り終わった後に「他に何かご心配なことはありませんか」と親御さんに尋ねることである。これは小児科診療において極めて重要である。子ども本人は

症状を正確に言葉では表現できないことが多いため、診療においては保護者の観察と訴えが診断の大きな手がかりとなる。しかし、診察の流れの中で十分に聞き出せないまま終わってしまうと、保護者が不安に感じていることや日常生活で困っている点が表に出ないまま残ってしまう危険がある。診察の最後に改めて質問の機会を設けることで、保護者は安心して疑問を打ち明けることができ、医師側も重要な情報を得られること可能性が高まる。また、この一言は単に情報収集のためだけでなく、親の気持ちに寄り添う姿勢を示す行為として信頼関係の強化にもつながる。小児科医療では、診断や治療と同じくらい「安心を提供すること」が大切であり、その第一歩がこの短い問いかけでできると学んだ。

午後は看護師さんと一緒に受付の問診を見学させていただけた。受付問診では看護師さんは患児の症状を細かく聞き正確な情報を医師に伝えておりチームワークが確立されており、チーム医療とはまさにこのことであると実感できた。その後予防接種後の絆創膏にイラストを描くのを体験させていただけた。自分はなぜ絆創膏にイラストを描くのか疑問だった。先生は絆創膏にイラストを描くのは単に子供が喜ぶからではないそうだ。子供が絆創膏のイラストを見て喜びそれを親が見て安心する環境を作るのが狙いだそうだ。そうすることで病院に対し信頼感を得られるためだそうだ。自分は患児を喜ばすためでなく親の信頼感を得ることまで配慮することに医療従事者のあり方を学んだ。自分も患者のために細かい配慮ができる医師になりたいと考えた。

今回の地域包括医療実習Ⅲを通して学んだのは、医学的知識や診察技術だけでなく、子供や保護者に寄り添う姿勢の大切さである。診察が遅れた時に一言謝罪することや、理解しやすい言葉で説明することは診察の基盤になると学んだ。小児科は体全体を扱うため非常に難しいと感じた。また実習を行い患児から症状を聞き出すのは極めて難しいことであると再認識できた。だからこそ1割の医療介入を見逃してはいけないことの大切さを実感した。自分も将来医師になった時「見逃さない姿勢」をもち続け、患児がなにで苦しんでいるのか原因を突き止め、多くの子供が元気に過ごせるのを手伝える医師になりたい。そしてこれから始まる小児科の講義では今回学んだ知識を活かして勉学に励みたい。

最後に今回の実習でお世話になった北原先生をはじめスタッフの皆様に深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。